

# 技術と制度における運動と矛盾についてのノート

高原 利生 ( )

## 概要

マルクスの資本論は、物々交換が定着して、商品がすでにあるという前提から始まる。マルクス以後、マルクスを解釈する立場からの矛盾、弁証法が世に普及した。しかし、マルクスが語らなかった推定六千年前の物々交換成立は、人類の歴史の大半を費やした最大の画期的発明、最大の変革、最大の運動だった。この変革、運動を扱わねばならない。

TRIZ の創始者アルトシュラーは、マルクス、エンゲルスの矛盾を、「技術的矛盾」「物理的矛盾」として対象をほとんどの運動に広げた。しかしまだ少し足りない。

全ての運動を扱うように、アルトシュラーの矛盾を拡張し、全ての運動を扱う最少モデルを求めたい。

技術とは、技術手段の生成と、その運用、保守の運動の全体であるように、根源的網羅思考の結論の一つによれば、「あるもの」は、「あるものの本質の生成と運動」である。世界近似の最小モデルの「本質の生成と運動」と言う時の「本質」とは「二項とその間の運動」ととらえる。「二項とその間の運動」の生成と運動が矛盾である。最初の物々交換は、二人の間の物々交換が初めて生まれたのである。「二項とその間の運動」を生成するのは、「二項とその間の運動」の外部からの運動だけである。

最小の近似モデルであるから、「二項とその間の運動」の二項の各項の属性数は2 以下、属性の値の数も2 以下になる。この最小モデルの機能は限られる。2 という数の片方が目標、もう片方が現在を表わす一変数の差異解消か、2 という数の両立を表わすかである。一変数の差異解消は、通常の変更作業（新機能生成、不具合解決、理想化という目的実現行為）である。二変数の両立は、属性の両立については「技術的矛盾」の拡張で、値の両立については「物理的矛盾」の拡張となる。

この矛盾は、マルクス、エンゲルスの使い方や、TRIZ における定義と完全な上方互換性を持ち、従来の TRIZ の豊富な結論の体系を変更せずそのまま活用でき、同時に、問題点を解決し、新たな展開の可能性を開く。

この運動の構造である矛盾、弁証法と、粒度と網羅を基礎とした根源的網羅思考が、両輪となって新しい方法と哲学を作る。